

「1543年 ヨーロッパより種子島に鉄砲伝来」、「1549年 ザビエルによりキリスト教伝来」と、16世紀中頃の日本史に、初めてヨーロッパが登場し、名前が記された最初の人のはザビエルです。ザビエルについて知りたいと思い、『日本、キリスト教との邂逅』（太田淑子編）と『ザビエルとその弟子』（加賀乙彦著）を読みました。



教科書に必ず掲載されているフランシスコ・ザビエル（1506-1552）の肖像画は外国の画家によるものと思っていました。ところが、これは大正9年（1920）に大阪・茨木市の山間部旧清溪村千提寺の旧家、東藤次郎氏宅の櫃の中から発見されたもので、作者は不明で、顔料などから、禁教令の増す1623年頃に、日本で制作されたものと想定されています。300年間秘匿されていた事になります。現在、神戸市立博物館所蔵です。磔にされて、天に繋がるキリストを、燃える心臓に抱いています。下の黄土色の部分には万葉仮名で、**さふらぬしすこ さべろりう さからめんと ぎよふかんじん**と、読めるとのことです。人間を漁る漁師ザビエルという意味でしょうか。イエズス会紋章 IHS も描かれています。

教皇から、東洋宣教のため派遣されたイエズス会の司祭ザビエルは、ポルトガル王の庇護のもとにインドのゴアやマレー半島のマラッカで活動していましたが、1547年にマラッカで鹿児島から逃亡してきた日本人アンジロウと出会いました。ポルトガル語を話すアンジロウと会話を深めることで、ザビエルは日本に関心を抱きました。「**新しく発見された諸地域の中で日本人は最も知識欲の旺盛な国民であると思う...彼らは理性によってのみ導かれる人々である**」と書簡に記すほど、好意的に日本人を受け止めたザビエルでした。ゴアの神学校でキリスト教を学んだアンジロウを通訳として、ザビエルたち総勢8名の宣教団は1549年8月にアンジロウの故郷鹿児島に上陸します。キリスト教の布教の保護を求め、また、日本の学問、宗教を見極めたいと願ったようです。

この時代、日本は室町時代末期の戦乱の時代でした。統一の成っていない日本は、鉄砲、その他の珍しい西洋文明を取り込みたい諸侯が、キリスト教も受け入れて行きました。ザビエルは鹿児島に1年ほど滞在し、約100人余りの日本人に洗礼を受け、4人の領主から布教の許可を受け、都へも出向きましたが、1551年11月にアンジロウを残し、マラッカへ戻りました。日本での布教の先鞭を付けた形でしょうか。東洋宣教の責任者であったザビエルは、中国への宣教を願い、その計画を実行に移そうと旅立ちますが、その途上、希望は叶わず、1552年12月に中国の広東省上川島で、46歳で病没しました。

ザビエルのサイン

『ザビエルとその弟子』はザビエルの最後の一年を描いたものですが、ザビエルのローマに送った多数の書簡から、史実をもとに、追憶、夢、回想の形で弟子たちと会話を交わし、彼の信仰を表しています。

ザビエルはバスク（フランスとスペインの国境地帯）人の貴族として生まれながら、若くして愛する家族を失い、パリ大学で哲学を学ぶうちに、イグナティウス・デ・ロヨラ等と「清貧・貞節・服従」を旨とするイエズス会を結成します。宗教改革の嵐の中、大航海時代の流れのなかで、「**すべての民を私の弟子にきなさい**」とのキリストの言葉に素直に従い、地の果てへの宣教に献身しました。ザビエルは高潔な知性と共に、祈りに打ち込む霊性、信仰に委ねる単純とも思える純粋さを持って、眼の前の障害にひるまず、熱い心で猪突猛進したのではないのでしょうか。